

源氏物語

藤のうら葉

紫式部

青空文庫

ふぢばなものもとの根ざしは知らねども

枝をかはせる白と紫
(晶子)

六条院の姫君が太子の宮へはいる仕度したくでだれも繁忙をきわめている時にも、兄の宰相中将は物思いにとらわれていて、ぼんやりとしていることに自身で気がついていた。自身で自身がわからない気もする中將であつた。どうしてこんなに執拗しつようにその人を思っているのであろう、これほど苦しむのであれば、二人の恋愛を認めてよいというほどに伯父おじが弱氣になつてゐることも聞いていたのであるから、もうずっと以前から進んで昔の關係を復活させればよかつたのである。しかしできることなら、伯父のほうから正式に婿として迎えようと言つて来る日までには昔の雪辱のために待つていたいと煩悶はんもんしているのである。雲井くもいの雁かりのほうでも父の大臣の洩もらした恋人の結婚話から苦しい物思いをしていた。もしもそんなことになつたならもう永久に自分などは顧みられないであろうと思つて悲しかった。接近おひをしようとはせずに、しかもこの二人のしているのは熱烈な相思の恋であつた。内大臣も甥おいの価値をしいて認めようとせずに、結婚問題には冷淡な態度をとり続けて

きたのであったが、雲井の雁の心は今も依然とその人にばかり傾いているのを知っては、親心として宰相中将の他家の息女と結婚するのを坐視するに忍びなくなった。話が進行してしまつて、中務なかつかさの宮でも結婚の準備ができたあとでこちらの話を言い出しては中将を苦しめることにもなるし、自身の家のためにも不面目なことになつて世上の話題にされやすい。秘密にしても昔あつた関係はもう人が皆知つていゝことであろう、何かの口実を作つて、やはり自分のほうから負けて出ねばならないとまで大臣は決心するに至つた。表面は何もないふうをしていても、あのことがあつてからは心から親しめない間柄になつていゝのであるから、突然言い出すのも如何いかなものであると大臣ははばかりられた。新しい婿迎への形式をとるのも他人が見ておかしく思うことであらうから、そんなふうにはせずによい機会に直接話してみたほうがよいかもしれないなどと思つていたが、三月の二十日はつかは大宮の御忌日おんきじつであつて、極楽寺へ一族の参詣さんけいすることがあつた。内大臣は子息たちを皆引き連れて行つていて、すばらしく権勢のある家のことであるから多数の高官たちも法会ほうえに参列したが、宰相中将はそうした高官たちに遜色そんしよくのない堂々とした風采ふうさいをしていて、容貌ようぼうなども今が盛りなようにもとのつていゝのであるから、高雅な最も貴いとうと若い朝臣あそんと見えた。恨めしかつたあの時以来、いつも内大臣と逢うあのは晴れがましいこと

に思われて、今日^{きょう}なども親^{しん}戚^{せき}じゅうの長者としての敬意だけを十分に見せて、そしてきわめて冷静に落ち着いた態度をとっている宰相中将に、今日の内大臣は特に関心が持たれた。仏前の誦^{ずき}經^{きやう}などは源氏からもさせた。中将は最も愛された祖母の宮の法事であつたから、経巻や仏像その他の供養のことにも誠^{まこと}心^{しん}をこめた奉仕ぶりを見せた。夕方になつて参会者の次々に帰るころ、木の花は大部分終わりがたになつて散り乱れた庭に霞^{かすみ}もよんで春の末の哀愁の深く身にしむ景色^{けしき}を、大臣は顔を上げて母宮のおいになつた昔の日を思いながら、雅趣のある姿でながめていた。宰相中将も身にしむ夕べの氣に仏事中よりもいつそうめいつた心持ちになつて、

「雨になりそうだ」

などと退散して行く人たちの言い合っている声も聞きながらなお庭のほうばかりがながめられた。好機会であるとも大臣は思つたのか、源中将の袖^{そで}を引き寄せて、

「どうしてあなたはそんなに私を憎んでいるのですか。今日の御法会の仏様の縁故で私の罪はもう許してくれたまえ。老人になつてどんなに肉身が恋しいかしのれない私に、あまり厳罰をあなたが加え過ぎるのも恨めしいことです」

などと言うと、中将は畏^{かしこ}まつて、

「お亡かくれになりました方の御遺志も、あなたを御信頼申して、庇護されてまいるようにと
いうことであつたように心得ておりましたが、私をお許しくださいませ御様子を拝見す
るものですから御遠慮しておりました」

と言つていた。天侯が悪くなつて雨風の中をこの人たちはそれぞれ急ぎ立てられるよう
に家へ歸つた。宰相中将は大臣がどうして平生と違つた言葉を自分にかけてのであらうと、
無関心でいる時のない恋人の家のことであるから、何でもないことも耳にとまつて、いろ
いろな想像を描いていた。

長い年月の間純情をもつて雲井の雁を思つていた宰相中将の心が通じたのか、内大臣は
昔のその人とは思われないほど謙遜けんそんな娘の親の心になつて宰相中将を招くのにわざとら
しくない機会を、しかも最もふさわしいような機会のあるのを願つていたが、四月の初め
に庭の藤ふじの花が美しく咲いて、すぐれた紫の花房はなぶさのなびき合うながめを、もてはやしも
せずに過ぎしてしまうのが残念になつて、音楽の遊びを家でした時に、藤の花が夕方にな
つていつそう鮮明に美しく見えるからといって、長男の頭とう中将を使いにして源中将を迎え
にやつた。

「極樂寺の花蔭かげではお話もゆつくりとする間のありませんでしたことが遺憾でなりません

でした。それでもしお閑暇ひまがあるようでしたらおいでくださいませんか」
というのが大臣の伝えさせた言葉である。手紙には、

わが宿の藤の色濃き黄昏たそがれにたづねやはこぬ春の名残なごりを

とあつた。歌われてあるとおりにすぐれた藤の花の枝にそれは付けてあつた。使いを受けた中将は心のときめくのを覚えた。そして恐縮の意を返事した。

なかなかに折りやまどはん藤の花たそがれ時のたどたどしくば

というのである。

「氣おくれがして歌になりませんよ。直してください」
と宰相中将は従兄いとこに言った。

「お供して行きましょう」

「窮屈ずいじんな隨身はいやですよ」

と言つて、源中將は従兄を歸した。中將は父の源氏の居間へ行つて、頭中將が使いに來たことを言つて内大臣の歌を見せた。

「ほかの意味があつてお招きになるのかもしれない。そんなふうな態度に出てくればおもしろくなかつた旧恨というものも消されるだろう。どうだね」

と源氏は言つた。婿の親として源氏はこんなに自尊心が強かつた。

「そんな意味でもないでしょう。対たいの前の藤が例年よりもみごとに咲いていますからこのごろの閑暇ひまなころに音楽の合奏でもしようとされるのでしょうか」

と宰相中將は父に言うのであつた。

「特使がつかわされたのだから早く行くがよい」

と源氏は許した。中將はあは言つていても、心のうちは期待されることと、一種の不安とが一つになつて苦しかった。

「その直衣のうしの色はあまり濃くて安やすつぽいよ。非参議級とかまだそれにならない若い人などにふたあい藍あいというものは似合うものだよ。きれいにして行くがよい」

と源氏は自身用に作らせてあつたよい直衣に、その下へ着る小袖類こそでもつけて中將の供をして來ていた侍童に持たせてやつた。中將は自身の居間のほうで念の入った化粧をしてか

ら黄^{たそ}昏^{がれ}時も過ぎて、待つほうで氣のもまれる時刻に内大臣家へ行つた。公^{きん}達^{だち}が中將をはじめとして七、八人出て来て宰相中將を座に招じた。皆きれいな公子たちであるが、その中にも源中將は最もすぐれた美^び貌^{ぼう}を持っていた。氣^け高^{だか}い貴人らしいところがことに目についた。内大臣は若い甥^{おい}のために座敷の中の差^さ図^ずなどをこまごまとしていた。大臣は夫人や若い女房などに、

「のぞいてごらん。ますますきれいになつた人だよ。とりなしが静かで、堂々として鮮明な美しさは源氏の大臣以上だろう。お父様のほうはただただ^{えん}艶^{えん}で、愛^{あい}嬌^{きよう}があつて、見ている者のほうも自然に笑^{えが}顔^おが作られるようで、人生の苦というようなものを忘れ去ることのできる力があつた。公務を執ることなどはそうまじめにできなかつたものだ。しかもこれが道理だと思われたものだ。この人のほうは學問が十分にできているし、性質がしつかりとしていてりっぱな官吏だと世間から認められているらしいよ」

などと言っていたが、身なりを正しく直して宰相中將に面会した。まじめな話^{あい}は^{さつ}挨拶^{さつ}に続いて少しただけであとは藤の宴に移った。

「春の花というものは、どの花だつて咲いた最初に目ざましい氣のしないものはないが、長くは人を楽しませずにどんどんと散つてしまうのが恨めしい氣のするころに、藤の花だ

けが一步遅れて、夏にまたがつて咲くという点でいいものだと心が惹かれて、私はこの花を愛するのですよ。色だつて人の深い愛情を象徴しているようでいいものだから」

と言つて微笑している大臣の顔も品がよくてきれいであつた。月が出て藤の色を明らかにさせるほどの明りは持たないのであるが、ともかくも藤を愛する宴として酒杯が取りかわされ、音楽の遊びをした。しばらくして大臣は酔つた振りになつて宰相中将に酒をしようとした。源中将は酔いつぶされまいとして、それを辞し続けていた。

「あなたは末世に過ぎた学才のある人物でいながら、年のいった者を憐んでくれないのは恨めしい。書物にもあるでしょう、家の礼というものが、甥おいは伯父おじを愛して敬うべきものですよ。孔子の教えには最もよく通じていられるはずなのだが、私を悩まし抜かれたとそう恨みが言いたい」

などと言つて、それは酒に酔つて感傷的になつていいのか源中将を少しばかり困らせた。「伯父様を決して粗略には思つておりません。御恩のあるお祖父様じいの代わりと思ひますだけども、私の一身を伯父様の犠牲にしてもいいと信じているのですが、どんなことがお気に入らなかつたのでしょうか。もともと頭がよくないのでございますから、自身でも気づかずに失礼をしていたのでございましょう」

とうやうやくしく源中将は言うのであった。よいころを見て大臣は機嫌きげんよくはしやぎ出して「藤のうら葉の」（春日さす藤のうら葉のうちとけて君し思はばわれも頼まん）と歌った。命ぜられて頭とうの中将が色の濃い、ことに房ふさの長い藤を折って来て源中将の杯の台に置き添えた。源中将は杯を取ったが、酒の注つがれる迷惑を顔に現わしている時、大臣は、

紫にかごとはかけん藤の花まつより過ぎてうれたけれども

と歌った。杯を持ちながら頭を下げ、謝意を表した源中将はよい形であった。

いく返り露けき春をすぐしきて花の紐ひもとく折に逢あふらん

と歌った源中将は杯を頭中将にさした。

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまざらん

頭中將の歌である。二男以下にもその型で杯がまわされ「みさかな」の歌がそれぞれ出たわけであるが、酔っている人たちの作ったものであったから、以上の三首よりよいというものもなかった。七日の夕月夜の中に池がほの白く浮かんで見えた。大臣の言葉のように、春の花が皆散ったあとで若葉もありなしの木の梢こずえの寂しいこのごろに、横が長く出た松の、たいして大木でないのへ咲きかかった藤の花は非常に美しかった。例の美音べんの弁べん少将がなつかしい声で催馬楽さいばらの「葦垣あしがき」を歌うのであった。

「すばらしいね」

と大臣は戯談じやうだんを言つて、「年経にけるこの家の」と上手じやうずに声を添えた。おもしろい夕月夜の藤の宴に宰相中將の憂愁は余す所なく解消された。夜がふけてから源中將は酔いに悩むふうを作つて、

「あまり酔つて苦しくてなりません。無事に帰りうる自信も持てませんからあなたの寢室を拝借できませんか」

と頭中將に言つていた。大臣は、

「ねえ朝臣あそん、寢床をどこかで借りなさい。老人としよりは酔っぱらってしまつて失礼だからもう引き込むよ」

と言ひ捨てて居間のほうへ行つてしまった。頭中将が、

「花の蔭かげの旅寝ですね。どうですか、あとで迷惑になる案内役ではないかしら」

「寄りかかつて松と同じ精神で咲く藤なのですから、これは輕薄な花なものですか。とにかくそんな縁起でもない言葉は使わないでおきましょう」

と言つて、中将の先導をなお求める宰相中将であつた。頭中将は負けたような氣がしな
いでもなかつたが、源中将はりっぱな公子であつたから、ぜひ妹との結婚を成立させたい
とはこの人の念願だつたことであつて、満足を感じながら従弟いとこを妹の所へ導いた。宰相中
將はこうした立場を与えられるに至つた夢のような運命の変わりようにも自己の優越を感
じた。雲井くもいの雁かりはすっかり恥ずかしがつていたのであつたが、別れた時に比べてさらに美
しい貴女きじよになつていた。

「みじめな失恋者で終わらなければならなかつた私が、こうして許しを受けてあなたの良お
人ひとになり得たのは、あなたに対する熱誠がしからしめたのですよ。だのにあなたは無関心
に冷ややかにしておいでになる」

と男は恨んだ。

「少將の歌われた『葦垣あしがき』の歌詞を聞きましたか。ひどい人だ。『河口かはぐちの』（河口の

関のあら垣がきや守れどもいでてわが寝ぬや忍び忍びに」と私は返しに謡うたいたかつた」
女はあらわな言葉に羞恥しゆうちを感じて、

「浅き名を言ひ流しける河口はいかがもらしし関のあら垣

いけないことでしたわ」

と言う様子が娘らしい。男は少し笑って、

「もりにけるきくだの関の河口の浅きにのみはおはせざらん

長い年月に堆積たいせきした苦悩と、今夜の酒の酔いで私はもう何もわからなくなった」

と酔いに託して帳台の内の人になった。宰相中將は夜の明けるのも気がつかない長寝をしていた。女房たちが気をもんでいるのを見て、大臣は、

「得意になった朝寝だね」

と言っていた。そしてすっかり明るくなつてから源中將は帰って行つた。この中將の寝

起き姿を見た人は美しく思つたことであろう。

第一夜の翌朝の手紙も以前の続きで忍んで送られたのであるが、はばかり必要のない日になつて、かえつて雲井の雁が返事の書けないふうであるのを、蓮葉はすつばな女房たちはひじ脇を突き合つて笑つている所へ大臣が出て来て手紙を読んでみた。雲井の雁はますます羞恥しゆううちに堪えられなくなつた。

やはり昔と同じように冷ややかなあなたに逢つていよいよ自分が哀れな者に思われるのですが、おさえられぬ恋からまたこの手紙を書くのです。

咎とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ今日あらはる袖そでのしづくを

などと手紙はなれなれしく書いてあつた。大臣は笑顔えがおをして、

「字が非常に上手じようずになつたね」

などと言つていることも昔とはたいした変わりようである。返事の歌を詠よみにくそうにしている娘を見て、

「どうしたというものだ。見苦しい」

と言つて、雲井の雁が父をはばかりる気持ちも察して大臣は去ってしまった。手紙の使いは派手な纏頭てんとうを得た。そして頭中將が饗応きようおうの役を勤めたのであった。始終隠して手紙を届けに來た人は、はじめて真人間として扱われる氣がした。これは右近うこんの丞じょうで宰相中將の手もとに使っている男であつた。

源氏も内大臣邸であつた前夜のことを知つた。宰相中將が平生よりも輝いた顔をして出て來たのを見て、

「今朝けさはどうしたか、もう手紙は書いたか。聡明そうめいな人も戀愛では締まりのないことをするようになるものだが、最初の關係を尊重して、しかもあくせくとあせりもせず自然に解決される時を待つていた点で、平凡人でないことを認めるよ。内大臣があまりに強硬な態度をとり過ぎて、ついにはすつかり負けて出たということでは何かと評をするだろう。しかしあまり優越感を持ち過ぎて慢心的に放縱なほうへ轉向することのないようにしなくてはならない。今度の態度は寛大であつても、大臣の性格は、生一本でなくて氣むずかしい点があるのだからね」

などとまた源氏は教訓した。円満な結果を得て、宰相中將につりあいのよい妻のできたことで源氏は満足しているのである。宰相中將は子のようにも見えなかった。少し年上の

兄というほどに源氏は見えるのである。別々に見る時は同じ顔を写し取ったように思われる中將と源氏の並んでいるのを見ると、二人の美貌びぼうには異なつた特色があつた。源氏は薄色の直衣のうしの下に、白い支那風しなに見える地紋のつやつやと出た小袖こそでを着ていて、今も以前に変わらず艶えんに美しい。宰相中將は少し父よりは濃い直衣に、下は丁字染めちやうじのこげるほどにも薰物たきものの香を染しませた物や、白やを重ねて着ているのが、顔をことさら引き立てているように見えた。今日は御所からもたらされて灌仏かんぶつが六条院でもあることになつていたが、導師の来るのが遅くなつて、日が暮れてから各夫人付きの童女たちが見物のために南の町へ送られてきて、それぞれ變つた布施ふせが夫人たちから出されたりした。御所の灌仏の作法と同じようにすべてのことが行なわれた。殿上役人である公達きんだちもおおぜい参会していたが、そうした人たちもかえつて六条院でする作法のほうを晴れがましく考えられて、氣おくれが出るふうであつた。宰相中將は落ち着いてもいられなかつた。化粧をよくして身なりを引き繕つて新婦の所へ出かけるのであつた。情人として扱われてはいないが、少しの關係は持つている若い女房などで恨めしく思つているのもあつた。苦難を積たまんで護まもつて来た年月が背景になつてゐる若夫婦の間には水が洩もるほどの間隙かんげきもないのである。内大臣も婿にしていよいよ宰相中將の美点が明瞭めいりやうに見えて非常に大事がつた。負けたほ

うは自分であると意識することで大臣の自尊心は傷つけられたのであるが、中將の娘に対する誠実さは、今までだれとの結婚談にも耳をかさず独身で通して来た点でも認められると思うことで、不満の償われることは十分であった。女御にようよりもかえって雲井の雁のほうが幸福ではなやかな女性と見えるのを夫人や、そのほうの女房たちは不快がったのであるが、そんなことなどは何でもない。雲井の雁の実母である按察使大納言あぜちの夫人も、娘がよい婿を得たことで喜んだ。

源氏の姫君の太子の宮へはいることはこの二十日過ぎと日が決定した。姫君のために紫夫人は上賀茂かみがもの社やしろへ参詣さんけいするのであったが、いつものように院内の夫人を誘ってみた。花散里はなちるさと、明石あかしなどである。その人たちは紫夫人といっしよに出かけることはかえって自身の貧弱さを紫夫人に比べて人に見せるものであると思つてだれも参加しなかったから、たいして目に立つような参詣ぶりではなかったが、車が二十台ほどで、前驅も人数を多くはせずに人を精選してあつた。それは祭りの日であつたから、参詣したあとで一行は見物さしき棧敷にはいつて勅使の行列を見た。六条院の他の夫人たちのほうからも女房だけを車に乗せて祭り見物に出してあつた。その車が皆棧敷の前に立て並べられたのである。あれはだれのほう、それは何夫人のほうの車と遠目にも知れるほど華奢かしやが尽くされてあつた。源氏

は中宮ちゆうぐうの母君である、六条の御息所みやすどころの見物車が左大臣家の人々のために押しこわされた時の葵祭りあおいを思い出して夫人に語っていた。

「権勢をたのんでそうしたことをするのはいやなことだね。相手を見くびった人も、人の恨みにたたられたようになって亡なくなってしまったのですよ」

と源氏はその点を曖昧あいまいに言つて、

「残した人だつてどうだろう、中將は人臣で少しずつ出世ができるだけの男だが、中宮は類のない御身分になつていられる。その時のことから言えば何という変わり方だろう。人生は元来そうしたものののですよ。無常の世なのだから、生きている間は生きたいようにして暮らしたいとは思ふが、私の死んだあとであなたなどがにわかに寂しい暮らしをするようなことがあつては、かえつて今派手はでなことをしておかないほうがその場合に見苦しくないからと私はそんなことも思つて、十分まで物はせずにいる」

などと言つたのち源氏は高官なども棧敷さじきへ伺候して来るので男子席のほうへ出て行つた。今日近衛きようこのえの将官として加茂へ参向を命ぜられた勅使は頭中將とうのであつた。内侍使とうないいは藤とうない典侍しのすけである。勅使の出発する内大臣家へ人々はまず集まつたのであつた。宮中からも

東宮からも今日の勅使には特別な下され物があつた。六条院からも贈り物があつて、勅使

の頭中将の背景の大きさが思われた。宰相中将はいでたちのせわしい場所へ使いを出して典侍へ手紙を送った。思い合った恋人どうしであつたから、正当な夫人のできたことで典侍は悲観しているのである。

何とかや今日のかざしよかつ見つとおぼめくまでもなりにけるかな

想像もしなかつたことです。

というのであつた。自分のためには晴れの日であることに男が関心を持っていたことだけがうれしかつたか、あわただしい中で、もう車に乗らねばならぬ時であつたが、

かざしてもかつたどらるる草の名は桂かつらを折りし人や知るらん

はかせ
博士でなければわからないでしょう。

と返事を書いた。ちよつとした手紙ではあつたが、気のきいたものであると宰相中将は思った。この人とだけは隠れた恋人として結婚後も関係が続いていくらしい。

姫君が東宮へ上がった時に母として始終紫の女にょおう王がついて行っていねばならないはずであるが、女王はそれに堪えまい、これを機会に明石あかしを姫君につけておくことにしようかと源氏は思った。紫夫人も、それが自然なことで、いずれそうした日のなければならぬ母と子が今のように引き分けられていることを明石夫人は悲しんでいるであろうし、姫君も幼年時代とは違ってもう今はそのことを飽き足らぬことと悲しんでいるであろう、双方から一人の自分が恨まれることは苦しいと思うようになった。

「この機会に真実のお母様をつけておあげなさいませ。まだ小さいのですから心配でなりませんのに、女房たちといつても若い人が多いのでございますからね。また乳母めのとたちといつても、ああした人たちの周到さには限度があるのですものね、母がいなければと思いますが、私がそうずっとつききつていられないあいだあいだはあの方がいてくださったら安心ができると思います」

と女王は良人おとこに言った。源氏は自身の心持ちと夫人の言葉とが一致したことを喜んで、明石へその話をした。明石は非常にうれしく思い、長い間の願いの実現される気がして、自身の女房たちの衣裳いしやうその他の用意を、紫夫人のするのに劣らず派手はでに仕度したくし始めた。姫君の祖母の尼君は姫君の出世をどこまでも観望したいと願っていた。そしてもう一度だ

け顔を見たいと思う心から生き続けているのを、明石は哀れに思っていた。その機会だけは得られまいと思うからである。最初は紫夫人が付き添って行った。紫夫人には輦れんしゃ車も許されるであろうが、自身には御所のある場所を歩いて行かねばならない不体裁のあることなども、明石は自身のために歎なげかずに源氏夫婦が磨みがきたてて太子に奉る姫君に、自分という生母のあることが玉の瑕きずと見られるに違いないと心苦しがっていた。姫君が上がる式に人目を驚かすような華奢かしやはしたくないと源氏は質素にしたつもりであつたが、やはり並み並みのこととは見えなかつた。限りもなく美しく姫君を仕立てて、紫夫人は真心からかわいくながめながらも、これを生母に譲らねばならぬようなことがなくて、真実の子として持ちたかつたという気がした。源氏も宰相中將もこの一点だけを飽き足らず思った。

三日たつて紫の女王は退出するのであつたが、代わるために明石が御所へ来た。そして東宮みやすどころの御息所きりつぽの桐壺どうしの曹司で二夫人はじめて面会したのである。

「こんな大人らしくおなりになつた方で、私たちは長い以前からの知り合いであることが証明されるのですから、もう他人らしい遠慮はしないでおきたいと思ひます」

となつかしいふうに紫夫人は言つて、いろいろな話をした。これが初めて二夫人の友情は堅く結ばれていくであろうと思われた。明石のものを言う様子などに、あれだけにも源

氏の愛を惹く力のあるのは道理である、すばらしい人であると夫人にはうなずかれるところがあった。今が盛りの氣高い貴女と見える女王の美に明石は驚いていて、たくさん女性の中で最も源氏から愛されて、第一夫人の榮譽を与えているのは道理のあることであると思つたが、同時に、この人と並ぶ夫人の地位を得ている自分の運命も悪いものでないという自信も持てたのであつたが、入り代わつて帰る女王はことさらはなばなしい人に付き添われ、輦車も許されて出て行く様子などは陛下の女御の勢いにならないのを見ては、さすがに溜息もつかれた。

きれいな姫君を夢の中のような気持ちでながめながらも明石の涙はとまらなかつた。しかしこれはうれしい涙であつた。今までいろいろな場合に悲観して死にたい氣のした命も、もつともつと長く生きねばならぬと思うような、朗らかな気分になることができて、いつさいが住吉の神の恩恵であると感謝されるのであつた。理想的な教養が与えられてあつて、足りない点などは何もないと見える姫君は、絶大な勢力のある源氏を父としているほかに、すぐれた麗質も備えていることで、若くいらせられる東宮ではあるがこの人を最も御愛寵あそばされた。東宮に侍している他の御息所付きの女房などは、源氏の正夫人でない生母が付き添っていることをこの御息所の瑕のように噂するのであるが、それに

影響されるようなことは何もなかった。はなやかな空氣が桐壺きりつぼに作られて、芸術的なにおいをこの曹司で嗅かぎうることを喜んで、殿上役人などもおもしろい遊び場と思い、このすぐれた女房を恋の対象にしてよく来るようになった。女房たちのとりなし、人への態度も洗練されたものであった。紫夫人も何かのおりには出て来た。それで明石との間がおいおい打ち解けていった。しかも明石はなれなれしさの過ぎるほどにも出過ぎたことなどはせず、紫夫人はまた相手を輕蔑けいべつするようなことは少しもせずに怪しいほど雅致がちのある友情が聡明そうめいな二女性の間にかわされていた。源氏も、もう長くもいられないように思う自身の生きている間に、姫君を東宮へ奉りたいと思つていたことが、予期以上に都合よく実現されたし、それは彼自身に考えのあつてのことではあるが、配偶者のない、たよりない男と見えた宰相中将も結婚して幸福になったことに安心して、もう出家をしてもよい時が来たと思われるのであった。紫夫人は気がかりであるが、養女の中宮がおいでになるから、何よりもそれが確かな寄りかかりである、また、姫君のためにも形式上の母は女王のほかにはないわけであるから、仕えるのに誠意を持つことであろうからと源氏は思つていたのであった。花散里はなちるさとのためには宰相中将がいるからよいとそれも安心していた。

翌年源氏は四十になるのであったから、四十の賀宴の用意は朝廷をはじめとして所々で

していた。

その秋三十九歳で源氏は準^{じゆん}太^だ上^{じやう}天皇の位をお得になった。官から支給されておいでになる物が多くなり、年官年爵の特権数がおふえになったのである。それでなくても自由でないことは何一つないのでありになったが、古例どおりに院司などが、それぞれ任命されて、しかもどの場合の院付きの役人よりも有為な、勢いのある人々が選ばれたのであった。こんなことになって心安く御所へ行くことのおできにならないことになったのを六条院は物足らずお思いになった。この御処置をあそばしてもまだ帝は不満足に思^{おも}召^{めしめ}され、世間をはばかりるために位をお譲りになることのできぬことを朝夕お歎^{なげ}きになった。

内大臣が太政大臣になって、宰相中将是中納言になった。任官の礼廻りをするために出かける中納言はいつそう光彩の添うた気がして、身のとりなし、容貌^{ようぼう}の美に欠けた点のないのを、舅^{しゅうと}の大臣は見て、後宮の競争に負けた形になっているような宮仕えをさせるよりも、こうした婿をとるほうがよいことであるという気になった。雲井^{くもい}の雁^{かり}の乳母^{めのと}の大輔^{たゆう}が、

「姫君は六位の男と結婚をなさる御運だった」

とつぶやいた夜のことが中納言にはよく思い出されるのであったから、美しい白菊が紫

を帯びて来た枝を大輔に渡して、

「あさみどりわか葉の菊をつゆにても濃き紫の色とかけきや

みじめな立場にいて聞いたあなたの言葉は忘れないよ」

と朗らかに微笑して言った。乳母めのとは恥ずかしくも思ったが、気の毒なことだったとも思
いおかわいらしい恨みであるとも思った。

「二葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき

どんなに憎らしく思おぼしめ召めしたでしょう」

と物馴なれたふうに言つて心苦なしがった。納言になったために来客も多くなり、この住居すまい
が不便になつて、源中納言はお亡なくなりになった祖母の宮の三条殿へ引き移った。少し荒
れていたのをよく修理して、宮の住んでおいでになった御殿の装飾を新しくして夫婦のい
る所にした。二人にとっては昔を取り返しえた気のする家である。庭の木の小さかったの

が大きくなつて広い蔭かげを作るようになっていたり、ひとむら薄すすきが思うぞんぶんに拡ひろがつてしまつたりしたのを整理させ、流れの水草を掻かき取らせもして快いながめもできるようになつた。

美しい夕方の庭の景色けしきを二人でながめながら、冷たい手に引き分けられてしまつた少年の日の恋の思い出を語っていたが、恋しく思われることもまた多かつた。当時の女房たちは自分をどう思つて見たであらうと雲井の雁は恥へずかしく思つていた。祖母の宮に付いていた女房で、今までまだそれぞれの部屋へやに住んでいた女房などが出て来て、新夫婦がここへ住むことになつたのを喜んでいた。

源中納言、

なれこそは岩もあるじ見し人の行くへは知るや宿の真清水ましみづ

夫人、

なき人は影だに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水

などと言ひ合つてゐる時に、太政大臣は宮中から出た帰途にこの家の前を通つて、紅葉もみじの色に促されて立ち寄つた。宮がお住まいになつた当時にも変わらず、幾つの棟むねに分かれた建物を上手じょうずにはなやかに住みなしているのを見て大臣の心はしんみりと濡ぬれていった。中納言は美しい顔を少し赤らめて舅しゅうとの前まへにいた。美しい若夫婦ではあるが、女のほうはこれほどの容貌ようぼうがほかにないわけではないと見える程度の美人であつた。男はあくまでもきれいであつた。老いた女房などは大臣の来訪に得意な気持ちになつて、古い古い時代の話などをし出すのであつた。そこに出了ままになつていた二人の歌の書いた紙を取つて、大臣は読んだが、しおれたふうになつた。

「この水に聞きたいことが私にもあるが、今日は縁起を祝つてそれを言わないことにしよう」

と言つて、大臣は、

そのかみの古い木はうべも朽ちにけり
植ゑし小松も苔生こけおひにけり

この歌を告げた。中納言の乳母めのとの宰相の君は、あの当時の大臣の処置に憤慨して、今も恨めしがっているのであったから、得意な気持ちで大臣に言った。

いづれをも蔭かげとぞ頼む二葉より根ざしかはせる松の末々

この感想がどの女房の歌にも出てくるのを中納言は快く思った。雲井の雁はむやみに顔が赤くなつて恥ずかしくてならなかつた。

十月の二十日過ぎに六条院へ行幸みゆきがあつた。興の多い日になることを予期されて、主人の院は朱雀院すざくをも御招待あそばされたのであつたから、珍しい盛儀であると世人も思つてこの日を待つていた。六条院では遺漏のない準備ができていた。午前十時に行幸があつて、初めに馬場殿へ入御にゆうぎよになつた。左馬寮さまりよう、右馬寮うまりようの馬が前庭に並べられ、左近衛さこんえ、右近衛うこんえの武官がそれに添つて列立した形は五月の節会せちえの作法によく似ていた。午後二時に南の寝殿へお移りになつたのであるが、その通御の道になる反橋そりはしや渡殿わたどのには錦を敷にしきいて、あらわに思われる所は幕を引いて隠してあつた。東の池に船などを浮うけて、御所の鵜飼う役人、院の鵜飼いの者に鵜を下おろさせてお置きになつた。小さい鰯ふななどを鵜は取つた。

観覧えいらんに供えるというほどのことではなく、お通りすがりの興におさせになったのである。山の紅葉もみじはどこのも美しいのであるが、西の町の庭はことさらにすぐれた色を見せているのを、南の町との間の廊の壁をくずさせ、中門をあけて、お目をさえぎる物を省いて御覧にお供えになったのであった。二つの御座おましが上に設けられてあつて、主人の院の御座が下がつて作られてあつたのを、宣旨せんじがあつてお直させになった。これこそ限りもない光榮であるとお見えになるのであるが、帝みかどの御心みこころにはなお一段六条院を尊んでお扱いになれないことを残念に思召おもほしめした。

池の魚を載せた台を左近少将が持ち、蔵人くらうど所の鷹飼たかがいが北野で狩獵してきた一つがいの鳥を右近少将がささげて、寝殿の東のほうから南の庭へ出て、階段きざはしの左右に膝ひざをついて献上の趣を奏上した。太政大臣が命じてそれを大御肴おおみさかなに調べさせた。親王がた、高官たちの饗膳きやうぜんにも、常の様式を変えた珍しい料理が供えられたのである。人々は陶然と酔つて夕べに近いころ、伶人れいじんが召し出された。大衆というほどの大がかりなものでなく、感じのよいほどの奏樂の前で御所の侍童たちが舞つた。朱雀院すざくの紅葉もみじの賀の日がだれにも思い出された。「賀王恩がおうおん」という曲が奏されて、太政大臣の子息の十歳ぐらいの子が非常におもしろく舞つた。帝は御衣みえを脱いで賜い、父の太政大臣が階前でお礼の舞踏を

した。主人の院はお折らせになった菊を大臣へお授けになるのであったが、青海波の時を思い出しておいでになった。

色まさる籬まがきの菊もをりをりに袖打ちかけし秋を恋ふらし

当時ごいつしよに舞った大臣は、自身も人にすぐれた幸福は得ていながらも、帝の御子であらせられた院の到達された所と自身とは非常な相違のあることに気がついた。時雨しぐれは彼の出て来るおりをうかがっていたようにはらはらと降りそそいだ。

「紫の雲にまがへる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る

最もふさわしい時に咲いた花でございます」

と大臣は院へ申し上げた。夕風が蒔まき敷く紅葉のいろいろと、遠い渡わた殿に敷かれた錦にしきの濃淡と、どれがどれとも見分けられない庭のほうに、美しい貴族の家の子などが、白しろ橡る、臙脂えんじ、赤紫などの上着を着て、ほんの額だけにみずらを結い、短い曲をほのかに舞

つて紅葉の木蔭^{こかげ}へはいって行く、こんなことが夜の闇^{やみ}に消されてしまいかと惜しまれた。奏樂所などは大形^{おおぎよう}に作ってはなくて、すぐに御前での管絃^{かんげん}の合奏が始まった。御書所の役人に御物の樂器が召された。夜がおもしろく更^ふけたところに樂器類が御前にそろった。「宇陀^{うだ}の法師」の昔のままの音を朱雀院^{すざく}は珍しくお聞きになり、身にしむようにもお感じになった。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉^{もみじ}の折りをこそみね

現今の御境遇を寂しがっておいでになるような御製である。

帝が、

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と朱雀院へ御説明的に申された。帝の御容貌はますますお美しくおなりになるばかりであった。今ではまったく六条院と同じお顔にお見えになるのであるが、侍している源中納

言の顔までが同じ物に見えるのは、この人として過分なしあわせであつた。気^{けだ}高い美が思いなしによるのかいささか劣つて見えた。鮮明にきわだつてきれいな所などはこの人がよけいに持つているように見えた。この人は笛の役をしたのである。合奏は非常におもしろく進んでいった。歌の役を勤める殿上人は階段の所に集まっていたが、その中で弁^{べん}の少将の声が最もすぐれていた。

前生の善果を持つて生まれてきたような人たちというべきであらう。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

藤のうら葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>